

事情のある特別養子縁組

女の子はある一定の確率で触れてほしくない妊娠をすることがあります。性被害については打ち明けることすらできません。女の子は妊娠した事実すら否定します。記憶から欠落していることもあります。記憶が残っていると自分の心がバラバラになります。その時の記憶がすっかり欠け落ちていることもあります。記憶があると生きてゆけません。自衛本能で記憶が欠落します。そのため話がちぐはぐになります。詳細についてはとても話してくれません。そんなときは交換日記をします。何でも書いていいよといってノートを渡します。支援する女性スタッフも限定します。同じスタッフだけが話をします。そばに座っているだけの時もあります。ずっと無言のまま傍に座っているだけこともあります。ぼつりぼつり事情を話してくれることもあります。ノートにだけ事情を少し書いてくれることもあります。ノートにはずっと死にたいと思っていました。消えてなくなればいいと思っていました。消えていなくなれば考えなくて済む。自分さえいなくなればこれが終わる。ずっと死ぬことばかり考えていました と書かれていました。

このような妊娠の場合 妊娠が終了して養育委託になったとしても母親が子供に会ってくれることは難しくなります。

【 生母さんの状況によっては生母さんが面会交流を断ることもある 】

妊娠した経緯によっては子供との面会交流を望まないことがあります。その場合は無理強いはありません。しかし子供が大人になって生母さんの事を探しに来るかもしれないとは伝えておきます。あるいはどうやっても会えない場合 会えない理由について生母さんから子供にメッセージを残してもらうようにしています。あるいは妊娠した経緯について生母さんの代わりに支援者が子供に話したり伝えてもいいという委任状をもらっておきます。そしてそれでも生母さんの気が変わったら会うことにしてもいいんだよと伝えます。

【 伝えることが苦しい生母の情報について 米国の支援者から 】

養子にとって目を覆いたくなる後ろ向きな生母の情報でも 事実が知りたいという養子の願いがあれば周知な準備をして伝えるようにしている。そのような事例の場合 妊娠に至った経緯よりもむしろ生母の人柄が知れる些細なエピソード（好きな歌 好きな本 好きな場所 好きな料理 得意なこと 見ていた風景）や家族についての情報（祖父母について 仕事 住所 兄弟 身長）が養子にとって大切な情報になるのだと教えてくれた。

妊娠に至った経緯は子供が聞くには辛すぎることもある。しかし それを聞いて得心する子もいる。なぜ母親が頑なに会うことを拒否するのか。それが知れてよかった。これで得心がいった。そして手離れた。そして生母が妊娠した経緯を無しとしたように子供も妊娠した経緯を手放すことができた。そして私はこの過去を選択しない。せっかく生母が過去をリセットしてくれた。だから私も過去をリセットする。この過去を私の過去とはしない。私の過去は私を生んでくれた母親がいる。そして私を育ててくれた養親がいる。そこから私の歴史は始まった。それより前の過去は私から切り離す。そこから前の過去はない。私はここから始まった。そう選択する子もいます。

【 養子にどんな情報を残しておくか 】

養子縁組を希望する妊婦が支援事業者に連絡してきた場合 できるだけ詳細な生母の情報を聴

取することになっています。妊娠した経緯（どういう理由で妊娠したか 強姦 未婚 DV 若年 男性の失踪 不倫 性産業など） 現在の居住地（安定した住居があるか） 経済状況（医療費が支払えているのか 交通費や生活費が支払えているのか）についてしっかりと聴くようにしています。これらの情報は生母の置かれた危機的状況を把握するために重要です。良好な信頼関係が構築できたら次は家族についての情報（両親や兄弟 その仕事 趣味 成育歴）や身体・成育・趣向情報（既往歴 手術歴 身体的特徴 生き立ち 打ち込んだこと 得意なこと 趣味 好きなこと 好きな場所 好きな歌 好きな食事）も聞いておきます。これらは養子縁組が成立した後 生母を捜索する際に必要な情報となるだけでなく 人となりを想像させるための（人物像を思い描ける）ための貴重な情報となります。なぜなら 将来生母を捜索しても面会できない可能性（拒絶 死去）もあり これらの情報が後に生母の人となりを思い描くため養子にとって貴重な情報となるからです。

【 肯定できる産婦人科医師は鍵になる 】

養子縁組に携わる医師は養子縁組について肯定的な捉え方ができることが望ましい。また支援者も養子縁組について肯定的な価値観を持つ産婦人科医師と良好な関係性を作っておくことが望ましい。産婦人科医師の影響力はとても大きく たとえ周囲に状況を受け入れてくれる人がおらず完全に孤立したとしても 産婦人科医師が肯定的に捉えてくれるだけで大事な拠り所ができる。これはとても大きな安心になる。誰にも話が打ち明けられず孤立した生母である。肯定的な理解者(医師やサポーター)がいるだけで 苦しみを打ち明けられるようになり 打ち明けてくれることによりサポーターも介入することができるようになる。打ち明けられることでケースワーカーも解決に向けた助言をすることができるようになる。たとえ後ろ暗いことでも非難されず吐きだせるだけで安心するものである。否定されず吐き出せると次のことが考えられるようになる。

【 コラム ある生母の苦しみ 米国の事例について 】

〇〇に進学したころ性被害にあい妊娠してしまった。カトリック教徒なので中絶もできない。人生で一番苦しかった。何度も死のうと思った。そのうち鬱病になり 自分なんて価値がない 消えればいい 死にたい 消えれば楽になると思うようになった。そんな日々が続いた。妊婦健診も一度しか行かなかった。性被害だなんてことは誰にも言えない。言えないから苦しみが吐き出せないし 言わないから誰にも理解されないし助けてもらえない。もうどうにでもなれと思っていた。妊娠中も胎児への愛情が全く感じられず生まれた子供の顔なんて見たくなかった。見たら（加害男性の）顔を思い出す。怒りが湧いてきて絶対に私には育てられないと思った。この時だけは赤ちゃんとの面会を促されたがあまりにも苦しすぎてありえないと思っていた。赤ちゃんが産まれたあと分娩室で過ごしていた時も看護師が淡々と仕事をして私に声をかけないでいてくれたことが心地よかった。むしろおせっかいをやいて 『抱いてごらんささい。ほらかわいい赤ちゃんよ！ 天使みたい』と言われると 『もういい！！ ほっといて！！ 大丈夫だから！』と拒絶していた。だから赤ちゃんを抱っこすることもなかったし赤ちゃんの顔も一切見なかった。しかしある夜 夜勤の看護師が私がこれだけ拒絶しているにも関わらず優しく赤ちゃんを包んで私に赤ちゃんを抱っこさせてくれた。本当に不思議な看護師だった。でも抱っこしたその瞬間電撃が走った 『この子はこの子 ただそれだけなんだ』と突然理解した。本当に想像もしていなかった。性被害であることも関係ない この子はこの子なのである ただそれだけなのである。この子は妊

娠の経緯とは無関係に ただ生を受けただけなのである。すたとんと理解した。するといままで凍りつかせていた感情が溢れ出し涙が止めどもなく流れてきた。それと同時に 『 ごめんなさい。妊娠中一度も声をかけてあげられないで 優しくしてあげなくて おなかをなでてあげなくて 』 という思いがこみあげてきた。妊娠していた 10 ヶ月ものあいだ なんともったいないことをしたのだろう。なんで声をかけてあげなかったのだろう。本当にもったいないことをした。赤ちゃんにごめんなさいと謝った。そのあとはずっと抱っこしていた。そしてこの子が愛おしく 何としても幸せにしてあげないとならないとを感じるようになっていた。

しかし その当時は生活力のない学生が性被害により妊娠した子供をシングルマザーとして育ててゆける状況ではなかった。だから泣く泣く養子として送り出すことを決めた。そして育てられない情けない自分を責めた。養子に送り出した後 毎週 1~2 回 6 時間くらいお祈りしながらずっと子どもに謝り続けていた。